

戦後80年 沖縄慰霊の日

「もう二度と、武装しない させない」



6月23日、那覇教区は「第39回カトリック那覇教区平和巡礼」を開催した。全国から13教区の司教も参加。激しい地上戦で20万人が犠牲になった沖縄の人々と共に祈り、「もう二度と、武装しない させない」決意を新たにされた。(写真上=徒歩巡礼を終え「魂魄之塔」(写真奥)の前で行われた集い/写真下=集いでのお花)

戦後80年 那覇教区慰霊の日

- 戦後80年 沖縄慰霊の日 1面
- 世界平和の実現へ 力尽くす決意新たに 2面
- 国際
- 教皇、聖年の「家庭の祝祭」ほか 3面
- 教皇の一般謁見講話 4面
- 国内
- 教皇レオ14世就任記念ミサ(東京)ほか 5面
- 戦後80年~癒えない傷跡
旧満州での過酷な体験語る 6面
- 戦後80年 司教団メッセージ
「平和を紡ぐ旅 — 希望を携えて —」 7・8面
- 日本カトリック司教団 核兵器廃絶宣言2025 8面
- 主日の福音解説 9・10面
- 短歌・俳句・映画紹介・きょうをささげる7月の祈り 11面
- 訃報・告知板・番組 12面

カトリックジャパンニュース



オンラインでニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」では、バチカンの動画も配信しています。教皇レオ14世の肉声や、教皇フランシスコが亡くなる前日、主の復活を祝った声もお聞きになれます⇒



戦後 80年

世界平和の実現へ 力尽くす決意新たに カトリック那覇教区第39回平和巡礼

沖縄戦で組織的戦闘が終結したとされる沖縄「慰霊の日」の6月23日、那覇教区(ウェイン・バート司教)は第39回「カトリック那覇教区平和巡礼」を開催した。終戦から80年を迎えた今年の平和巡礼には、世界平和の実現に力を尽くす誓いを新たにすため全国から13教区の司教も参加。住民を巻き込んだ激しい地上戦で20万人を超える人々が犠牲になった沖縄の人々と祈りを共にし、「もう二度と、武装しないさせない」決意を新たにす。巡礼には延べ約200人が参加した。

平和巡礼は、午前6時から那覇市の小禄教会でささげる「平和祈願 追悼ミサ」で始まり、同教会から沖縄島南部、糸満市米須の戦没者慰霊塔「魂魄之塔」まで約15

この日ミサを主司式した日本カトリック司教協議会会長の菊地功枢機卿(東京教区)は説教で、世界で戦争が続き、沖縄を含む南西諸島での軍備強化が進む中で、戦争の歴史からの教訓を忘れさせ、「美化」する動きがあることを指摘。特に若い世代に呼びかけることを目指した戦後80年の司教団メッセージ「平和を紡ぐ旅—希望を携えて—」(本紙7・8面掲載)が、沖縄の人々が叫び続けてきた平和や、核兵器廃絶を訴えていることを紹介し、平和のために声を上げ、行動していきたいと結んだ。

ミサ後、参加者は小禄教会の信徒らが用意したおにぎりなどを食べ、徒歩巡礼に出発した。途中3地点で休憩を取る間に戦争体験者の『証言』が朗読され、参加者は日本兵が細いひもで幼児の首を絞

めて殺す場を目撃した、当時19歳だった人の体験などに耳を傾けて祈り、また次の地点へと出発した。

参加者の高齢化で年々、車で移動しながら巡礼に参加する人は増えているが、今年も「ひめゆりの塔」近

くにある最後の休憩地点から魂魄之塔までの約1・4kmは歩く人が大半だった。

魂魄之塔前で行われた祈りの集いでは、沖縄カトリック中学高等学校の生徒4人が「二度と過ち(戦争)を繰り返さない」と平和を誓った。

今年的那覇教区「沖縄慰霊の日 司教メッセージ」は、バート司教と共に、同教区の男性、女性、青年、子どもの代表がそれぞれの「心」としてリレー形式で読み上げた。

同メッセージは、「すべての戦争を完全に否定し、拒否する方法を求め続けてきた」沖縄の人々が、近隣諸国の脅威を理由に「再び戦争への備えを強いられ、戦闘終結後も続く軍事に伴うあらゆる人権侵害と人間の尊厳を踏みにじる行為に、いまだにさらされ続けて」と指摘する。「特に最近、強引な要塞化が県全体におよび、自国とその同盟国によって自治権が侵害され、再び戦場とされるのを拒む沖縄の民意と人権そのものが無視されている」とも訴える。同教区が「不戦の誓いを果たし、自治権の完全な回復を実現する具体的な手段」として「沖縄が戦場から非武装中立平和特区となること」を提案し、全世界の戦争犠牲者の「悲願」

だった「愛と平和な世界」を実現する使命を全うできるよう祈る内容だった。

正午、沖縄県が主催する沖縄全戦没者追悼式の参加者など、この日、戦没者の慰霊と世界平和のために人々が行う1分間の黙とうに心を合わせた。その後、一人ずつ魂魄之塔の前に献花した。

沖縄・泡瀬教会の渡



「国がまた(戦争の準備をしよう)騒がしくなる中でも、私たちが穏やかな心を持って過ごせるようお守りください」と、沖縄の言葉で祈る沖縄戦体験者・新由富子さん(右/91、沖縄・首里教会)と、祈りに寄り添う那覇教区のウェイン・バート司教(「魂魄之塔」前での集いで)

慶次花歩さん(16)は、学校でも学んできた沖縄戦を「少しでもリアルに感じてみたい」と、祖母、母親と平和巡礼に初めて参加した。日差しの熱さを肌で感じながら歩き、「80年前、兵隊さん(日本兵)にひどい扱いをされながらここ(沖縄島南部)を逃げ続けた人たちも、このぐらい暑かったのか」と想像したという。

沖縄戦当時14歳だった具志堅貞子さん(94/沖縄・与那原教会)はこの日、娘と孫と共に車いすで魂魄之塔の前にある大分県出身の戦没者慰霊塔「大分の塔」も訪れた。80年前、沖縄島南部へと一緒に逃げていた母親が流れ弾で亡くなった後に出会い、以後の避難生活で世話になった日本軍の炊事担当者「今宮さん」の名が刻まれているためだ。

具志堅さんは「戦争、戦争って聞かされたときに(今宮さんら)一緒にいた人たちの顔が浮かんで寂しくなるとつぶやくと、涙があふれ言葉が続かなくなった。



午前6時から那覇市の小禄教会で司教たちと共にささげた「平和祈願 追悼ミサ」



「魂魄之塔」の前で、沖縄カトリック中学高等学校の生徒4人が「二度と過ち(戦争)を繰り返さない」と平和を誓った



「魂魄之塔」で献花し、祈りをささげる。左からヨゼフ・アベイヤ司教(福岡教区)、菊地功枢機卿、前田万葉枢機卿(大阪高松教区)

国際

教皇、聖年の「家庭の祝祭」 家庭は人類の未来の揺り籠



6月1日、「家庭・祖父母・高齢者の祝祭」を締めくくるミサで、教皇レオ14世に奉納のささげものを渡す家族(CNS)

【バチカン6月1日CNS】家庭は人類の未来の揺り籠だと教皇レオ14世は6月1日、聖年の「家庭・祖父母・高齢者の祝祭」を締めくくるミサで指摘した。

「今日の世界は、神の愛を知り、受け入れるための結婚の契約を必要としています。その一致と仲直りを促す力によって、人間関係と社会を損なう暴力に打ち勝つためです」と教皇はバチカンのサンピエトロ広場でささげたミサの説教で強調した。

信仰は家庭内で、「食卓に上る食べ物のように、そして心の底からの愛情のように分かち合われます。こうして家庭は、私たちが愛し、いつも私たちの幸せを願ってくださるイエスと出会うための恵まれた場となります」。

教皇は結婚した全ての夫婦に向けて、こう語りかける。「結婚は理想ではなく、男女の間の真の愛を測る基準です。それは完全で忠実で実り豊かな愛です」。その愛によって夫婦は、「神の似姿のうちに、いのちのたまものを授かることができますようになります」。

「ですから、私は皆さんに勧めます。子どもたちにとっての言行一致のお手本となってください。子どもたちに行動してもらいたいように行動し、従順を通した自由のうちに教育し、いつも子どもたちの良いところを見つけて、それを育てる道を見いだしてください」と教皇は夫婦たちに促す。

「そして子どもたちへ。ご両親に感謝してください。毎日、いのちのたまものとそれに付いてくる全部のことに『ありがとう』と言うことは、皆さんのお父さんとお母さんを敬う最初の方法です」と教皇レオ14世は続ける。

祖父母や高齢者に向けては、教皇はこう勧める。「皆さんの愛する家族を、知恵と思いやりで、そして年を重ねて得た謙遜と忍耐をもって見守ってください」



アクーティスとフラッサーティ 9月7日列聖へ



【バチカン6月13日CNS】教皇レオ14世は福者カルロ・アクーティス(写真左・OSV)とピエル・ジョルジョ・フラッサーティを共に9月7日に列聖するとバチカンが明らかにした。福者アクーティスはコンピューターを扱う技能を福音宣教に生かし、2006年に白血病により15歳で死去するまで、喜びにあふれる信仰の証しと他者への慈愛を示していた。福者フラッサーティは1901年にトリノの名家に生まれ、深い霊性と貧しい人への愛、いのちのために奉仕する熱意で称賞されていた。

教皇、近代兵器使用の禁止を訴える 「教会は戦地の叫びに引き裂かれる」

【バチカン6月18日CNS】世界は過去の戦争を上回る残虐性をもたらす恐れがある近代兵器の使用への誘惑を退けなければならない、と教皇レオ14世は訴える。

「教会の心は戦地から上がる叫びによって引き裂かれています。特にウクライナやイラン、イスラエル、ガザからの叫びです」と教皇は6月18日、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見の最後に語った。

「私たちは戦争に慣れてしまっただけではありません」と教皇は続ける。「そうではなく、私たちは強力で高性能な兵器の魅力を誘惑として退ける必要があります」

教皇レオ14世は、第2バチカン公会議の公文書『現代世界憲章』(79)から引用して、現代の戦争では「あらゆる種類の科学兵器が用いられ」、その結果として、「戦争はますます激烈なものとなり、戦闘員を過去の時代をはるかに越える残虐さに導く恐れがある」と指摘する。

「ですから、人間の尊厳と国際法の名の下に、私は責任のある人々に向かって、教皇フランシスコがよく使っていた言葉を繰り返します。『戦争は常に敗北です』」と教皇レオ14世は訴えた。さらに別の前任者である教皇ピオ12世の言葉を引用し、「平和で失われるものはありません。全ては戦争で失われます」と付け加えた。

教皇庁国務省長官のピエトロ・パロリン枢機卿は6月17日、イタリアのANSA通信に、聖座(バチカン)は核軍縮を提唱しており、核兵器の使用だけでなく保有も倫理に反するとする文書を作成したと明らかにした。この教会の姿勢は教皇フランシスコによって打ち出されていた。

教皇、「戦争の悲劇を終わらせて」 米軍によるイラン核施設の空爆受け

【バチカン6月22日CNS】米軍がイランの核施設3カ所を空爆した数時間後、教皇レオ14世は中東情勢に「憂慮」を表明し、外交努力だけが責任ある前進の方法だと強調した。

「国際社会の全てのメンバーに道義的責任があります。修復不能な溝を生み出す前に、戦争の悲劇を終わらせてください」と教皇は6月22日、バチカンのサンピエトロ広場に集まった数千人と共に「お告げの祈り」を唱えた後に訴えた。

米国のドナルド・トランプ大統領は6月21日夜、ワシントンで、「米軍はイランのフォルドウ、ナタンツとイスファハンにある三つの主要な核施設への大規模で精密な攻撃を実施した」と発表した。

「この叫びは責任と理性を求め、武器のごう音に圧倒されてはいけなと訴えています」と教皇は続ける。「人間の尊厳がかかっている時、遠く離れた紛争などあり得ません」

教皇はさらに、イランへの空爆という「この悲劇的な展開で、特にガザなどの地域で人々が毎日、苦しんでいることが忘れ去られてしまう危険があります」と訴える。

「戦争が問題を解決することはなく、むしろ悪化させて、人類の歴史に深い傷を残し、その癒やしには何世代もの時間を要することになってしまいます」と教皇は指摘する。「武力による勝利が、母親たちの痛みや子どもたちの恐れ、奪われた未来を償うことはできません」

「外交努力によって武器を黙らせましょう」と教皇レオ14世は呼びかける。「国々が暴力や流血の紛争ではなく、平和への努力で未来を開いていくことができますように」



教皇の一般謁見講話

神は寛容で計算しない

【バチカン5月21日CNS】福音書に記されている、良い土地に種をまく人や石だらけの土地にまく人が出てくる「種をまく人」のたとえは、「神が私たちを愛してくださるありようを示している」と教皇レオ14世は初めて開いた一般謁見で、参加した人々に語った。

このたとえが人々には奇妙に感じられるかもしれないのは、「私たちは物事を計算することに慣れてしまっているからです。そして時には必要なことではあっても、これは愛にはふさわしいことではありません」と教皇は5月21日、バチカンのサンピエトロ広場に集まった約4万の人々に説明した。

バチカンは3カ月以上、一般謁見を開いていなかった。教皇フランシスコが最後に一般謁見で巡礼者や来訪者に会ったのは2月12日で、その2日後に入院していた。4月21日に逝去した。

教皇は一般謁見を始めるに当たって、前教皇が聖年にちなんで「イエス・キリスト—私たちの希望」をテーマとして続けていた講話を引き継ぐと説明した。



ガザとウクライナでの平和訴える

【バチカン5月28日CNS】宗教心があるからといって、その人がそのままいつくしみ深いとは限らず、キリスト信者にとってのいつくしみはキリストに従うことの明らかなしるしにほかならない、と教皇レオ14世は強調する。

「宗教的な事柄である以前に、いつくしみは人間性の問題なのです」と教皇は5月28日、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見で語った。

教皇レオ14世は謁見の最後に、あらためてパレスチナ・ガザとウクライナでの平和を強く訴えた。

「ガザからは、お母さんやお父さんたちの叫びがさらに切実に天に向かって上がっています。亡くなった子どもたちの遺体を抱えているか、あるいは食べ物を探るか、爆撃からの安全な避難所を求めて移動を続けておられるのです」と教皇は現地の惨状を嘆く。「責任ある指導者たちに向けて、私はあらためて訴えます。戦闘をやめて、人質の全員を解放してください。人道法を全面的に守ってください」



神は全ての人の価値を認める

【バチカン6月4日CNS】神は全ての人を愛し、一人一人が自分の価値と尊厳を見いだすよう助けたいと願っていて、その思いは特に自分には価値がないか、評価されていないと感じている人に向けられている、と教皇レオ14世は強調する。

「神はご自分のみ国を全ての人に与えたいと望んでおられます。それは完全に永遠、至福のいのちです」と教皇は6月4日、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見で語った。

「そして、これはイエスが私たちにしてくださることです。主は序列を設けたりはされず、ご自身の全てをご自分に心を開く全ての人に与えてくださいます」と教皇は説明した。

教皇レオ14世は福音の希望をもたらすたとえについての講話を続けていて、今回は「マタイによる福音書」(20・1~16)の「ぶどう園の労働者」について話した。全ての弟子は永遠のいのちを受け継ぐ上で平等に扱われることを示している。

教皇は説明を続ける。このたとえは「私たちの希望を育てくれる物



6月18日、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見の前に、子どもにあいさつする教皇レオ14世。カードにはスペイン語で「こんにちは、ぼくのなまえもレオです」と書かれている(CNS)

語です。私たちは時として、私たちの人生に意味を見いだせないと感じることがあります。自分は役に立たない、ふさわしくないと感じてしまいます。市場で誰かが雇ってくれるのを待つ労働者のようです」。

「市場という設定は今の私たちの時代にぴったりだとも言えます。市場は取引の場で、残念なことに、お金もうけのために、愛情や尊厳さえも売り買いされる場だからです」と教皇は指摘する。「そして私たちは評価されていない、認められていないと感じれば、最初の誘いに応じてしまう恐れもあるのです」

「そうではなく、主は私たちに私たちの人生には価値があることを思い出させてくださいます。そして主の願いは、私たちがこのことを見いだす助けとなることなのです」



主に癒やしを願えば聞いてくださる

【バチカン6月11日CNS】誰かが神に向かって癒やしや助けを求めて叫び声を上げれば、神は必ず耳を傾けてくださる、と教皇レオ14世は強調する。

「神が聞かれない叫び声はありません。たとえ私たちが神に向かって叫んでいると知らなくても(出エジプト記2・23参照)」と教皇は6月11日、厳しい日差しの下、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見で語った。

教皇はイエスの生涯と公生活をもたらす希望についての講話を続けていて、今回は「マルコによる福音書」のイエスが目の不自由なバルティマイを癒やす物語(10・46~52)について話した。

教皇レオ14世は講話の冒頭で、6月は「イエスのみ心」の月であることに触れた。「ですから、私は皆さんに勧めます。キリストのみ心の前に、皆さんの最も苦しいこと、または弱いところ、人生の中で行き詰まり、動けなくなっていると感じていることを差し出してください。信頼をもって主に向かい、私たちの叫びを聞いて、癒やしてくださるようお願いしましょう」



イエスに向かい癒やしを願う

【バチカン6月18日CNS】希望がふたえてしまったかのように思える時、キリスト信者はイエスに向かえば、絶望に屈せずに癒やしへの願いを取り戻すことができる、と教皇レオ14世は説く。

「時として私たちは行き詰まり、袋小路に入ってしまったように感じて、希望を抱く意味はないように思ってしまう」と教皇は6月18日、強い日差しが降り注ぐバチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見に参加した数千人の巡礼者たちに語った。



国内

教皇レオ14世就任記念ミサ 共に一致して平和の実現を

新教皇レオ14世の教皇就任を記念するミサが6月18日、麴町教会（東京・千代田区）主聖堂でささげられ、信徒ら300人余りが参加した。菊地功枢機卿（東京教区）が主司式し、駐日教皇庁大使のフランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教と日本カトリック司教団が共同司式した。

菊地枢機卿は説教で、教皇レオ14世にとって「一致」と「平和」は大きなキーワードだと指摘。教皇は聖年に当たっての家庭・子ども・祖父母・高齢者の祝祭のミサ説教でこう語っている。

「わたしたちはさまざまですが、一つです。多くの者がいますが、にもかかわらず一つです。あらゆる状況においても、人生のあらゆる段階においても、つねにそうです」

戦後80年の今年は、日本各地で平和に思いをはせる祈りの時が持たれる。菊地枢機卿は「教皇レオ14世の呼びかけに応え、人間の尊厳を守り、一致のうちに平和を打ち立てる世界の実現のために共に働き続けたいと思います」と呼びかけた。



派遣の祝福をする菊地功枢機卿（中央）

武器見本市開催に 市民、宗教者が猛抗議

日本では2022年末に閣議決定された「安保三文書」（三文書で構成される日本の防衛政策）により殺傷能力のある武器の輸出が可能になり、今や日本は世界の軍需産業にとって魅力的な市場となっている。千葉県千葉市の幕張メッセでは通算5回目となる武器見本市が5月21日から23日まで開催され、初日の21日には会場入口で市民有志350人が武器売買で利益を得る「死の商人」たちに強く抗議をした。会場入口前で行われた市民による「大抗議行動」には、平和をつくり出す宗教者ネットや、カトリック正義と平和協議会など宗教関係者も参加した。

パレスチナ人の女性たちの姿もあり、「今も子どもたちが殺されているのです」と訴える中で、ガザ出身のハニンさんがこう声を上げた。

「武器見本市の陰でガザではジェノサイド（大虐殺）が続いています。武器見本市は大量虐殺を祝う場になっています。今や30万人以上のパレスチナ人が殺されています。病院や学校、住宅に爆弾が落とされています。生きてまま焼かれた人、頭を吹き飛ばされた赤ん坊…。最悪な状況が続いています。ここ千葉は、その虐殺で利益を得ている企業たちを歓迎しています。あなたたちは虐殺の共犯者です」

今回の武器見本市には、78カ国から450人の政府関係者を含む総勢8000人が参加した。



イーアールエステー

ERSTと鹿児島教区

災害対応ワークショップを実施

自然災害発生時、被災教区の初動対応を支援する「ERST」（正式名称は4月から「カリタスジャパンERST」）は5月23日、鹿児島教区本部事務局（鹿児島市）で同教区との災害対応ワークショップを開催した。

中野裕明司教（同教区）のほか教区の職員や災害対応に関心を持つ信徒ら8人と、ERST、カリタスジャパン事務局担当者の計17人が参加。発災後の教区とERSTの役割や連携を確認した上で、同教区に大型台風が上陸した場合の初動対応を検討した。



「建学の精神こそエネルギー源」 東北の2校 取り組み分かち合う

「日本カトリック教育学会特別活動Ⅲ」研修会

少子化などによって課題が多い学校経営の実際について、東北のカトリック学校2校の取り組みを共有し、共に考える研修会が5月24日、東京・千代田区の岐部ホールで開かれた。本研修会は大学の研究者らを中心にカトリック教育の研究や実践に取り組むグループ「日本カトリック教育学会特別活動Ⅲ」が主催し、会場とオンライン合わせてカトリック学校の教職員ら50人余りが参加した。

学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム・桜の聖母学院（設立母体・コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会／福島市）の西内みなみ理事長と、仙台白百合女子大学（設立母体・シャルトル聖パウロ修道女会／仙台市）学長の加藤美紀修道女が話題を提供した。

西内理事長は、「フクシマでカトリック学校の灯を消さないために」と題して同学院の取り組みを説明。経営は厳しくても、「（地域に）子どもたちがいて、学び舎があることが地域住民の心の支えになり、にぎわいを創出して、そこに住み続けようという思いにつながる」と話す。

同学院は昨年、「花園リバイバル計画」を策定。地域に開かれ、年齢に関係なく学ぶことのできる学校づくりや、中高を移転し（小学校や短期大学など）全ての学び舎を同じキャンパス内に集約することなどが計画されている。また修道院を基盤としたカトリックセンターの設置や近隣の二つの小教区との連携、宗教・学校行事に学院全体で取り組むことも構想に含まれている。



『シノドス流の教会 — 交わり、参加、宣教』

《シノドス最終文書》

カトリック中央協議会出版局から発売

「ともに歩む」教会の実現に向け、世界の教会から声を聴いたシノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会（2021～24年）の「最終文書」邦訳が6月末、カトリック中央協議会出版局から発売される。さまざまな人がともに歩むために、教会は誰と、どのように関わっていくのか、意思決定の道筋をどう考えるのかなど、指針を提示する。文書は五つの部からなり、各部の最初で福音書の一場面を思い起こすことから始める。本文のほかに、最終文書は「教会の生活と使命のための権威ある方向づけ」であり、「ペトロの後継者の通常の教導職に数えられるもの」と明言する前教皇フランシスコの「付記」と、最後の全体会議閉会あいさつを含んだ「付録」を収める。理解の助けとして関連年表と参加者名簿を付加。880円（税込）。問い合わせは、カトリック中央協議会出版局（電話03-5632-4429 FAX03-5632-4456）へ。



国内

戦後80年～癒えない傷跡 旧満州での過酷な体験語る

京都府亀岡市在住の黒田雅夫さん（88）はアジア太平洋戦争（1931～45年）末期から敗戦後にかけての約2年、満州で幼少期を過ごした。満州で母親と祖父を失い、父親と弟とは生き別れになり、たった一人残された黒田さんは8歳で路上生活者となった。その痛みをエネルギーに変え、子どもたちに戦争の悲惨さ、命の大切さを伝える「語り部」となった。息子の毅さんと共に学校で戦争体験を語り続けて17年になる黒田さんに話を聞いた。



4月20日に兵庫県たつの市内で開催された「市民による平和学習の集い」で「語り部」を務めた黒田雅夫さんと息子の毅さん

2年前の8月15日、黒田さんは満州での体験をまとめた絵本『今を生きる 満州からの引き揚げの記録』（英訳付／講演DVD付）を出版した。満州での記憶をたどって描いた約60枚の色えんぴつ画と体験談が収められている約100ページの大冊だ。黒田さんは、絵を見た人々からよく「当時7～8歳だったのに、なぜ半世紀以上前の体験を詳細に覚えているのですか？」という質問を受ける。

公立中学校教諭で人権教育を担当する息子の毅さんが代弁する。

「親に守られていた子どもたちは、満州での出来事をあまり覚えていないと言います。しかし父の場合は誘拐や人身売買の危険がある中で、たった一人で逃げ続けていたので、一つ一つの場面が脳裏に焼き付いてしまったようなのです。大人になっても、当時のことが夢に出てきて、夜うなされてしまうことがあり、今でも睡眠剤を飲まないで寝ることができないのです」

戦争によるPTSD（心的外傷後ストレス障害）と呼ばれているものなのだろう。その体験を黒田さんは次のように語ってくれた。

京都開拓団を結成し満州へ

満州国とは、アジア太平洋戦争のさなかに、大日本帝国が中国東北部を占領して建てた国だ。黒田さん家族が満州に渡った1944年は、日本政府が日本人を「満州開拓移民」として満州国へ移住させる政策を推進していた時期で、こう大々的な「触れ込み」をした。

——空襲のない土地で自作農ができる。兵役も免除される。ソビエト（当時）も参戦しない——。

2度の兵役を終えた黒田さんの父親は「もう戦争はごめんだ」と、兵役のない満州国への移住を決意した。同年6月に京都市では織物業に携わる人を中心に「満州廟嶺京都開拓団」が結成され、黒田さん一家も「開拓団」に加わった。

ところが満洲に到着し農業で生計を立

てようと思っていた矢先、父親に召集令状が届く。「兵役は免除される」という触れ込みだったのだが、父親は雨の降る夜、軍服姿で家を後にした。これが父親と母親にとって互いの姿を見る最後の別れとなったのだ。

そしてその2カ月後に日本は敗戦。そこから黒田少年と母親、祖父、弟の命懸けの逃避行が始まった。現地ではこれまで抑圧されていた満州の人々の不満が一気に爆発。またソビエト軍が参戦し、満州国に侵攻してくるのも時間の問題となった。「廟嶺京都開拓団」と「高知県四万十開拓団」が合流し約500人が吉林（チーリン）を目指した。

9月、やっと吉林を経て撫順（フーシュン）の収容所（引き揚げ者を一時的に住ませた場所）にたどり着くが、母親と祖父は寝たきりの状態に。冬になるにつれ、伝染病の発疹チフスが流行。生き残った人たちは、遺体から衣服を剥ぎ取って暖を取った。土が凍り埋葬もできず、収容所裏の広場は遺体の山に。逃避行の途中で、また収容所で、二つの開拓団の合計399人が死亡した。

祖父も母親も遺体置き場に放置

そうした過酷な状況下、祖父は68歳の生涯を終える。そして母親は自身の死期を悟ったのか、弟を子どものいない満州の人に預けた。それから数日後、寝たきりの母親がどこからか手に入れた材料で炊き込みご飯を作ってくれた。母親はそのご飯に一切手を付けず、黒田さんがおなかいっぱいになるまで食べさせた。全部食べ切れずにいると、母親は夜中に黒田さんを揺り起こして「全部食べなさい！」と叱った。母親の言う通りにして再び眠りにつくが、朝、目覚めると、母親は冷たくなって亡くなっていた。32歳だった。

あばら骨が浮き出た痩せ細った母親を、開拓団の団長と一緒に死体置き場に運んだ黒田少年。「まるで物を捨てるよ

うに母親の遺体を放り投げたあの悲しみとつらさは一生消えないトラウマ（心的外傷）となり、苦しむことになりました」と黒田さんは話す。

一人ぼっちになった8歳の黒田少年は毎日寝る場所を変えながら路上生活を続けた。後に中国人の修道女に保護され、カトリックの洗礼を受け「バイドウル」という洗礼名をもらう。そして日本に帰国後はメリノール宣教会の児童養護施設に一時保護され、その後、亀岡市に住む祖母に引き取られた。

そんな黒田さんにとって忘れられない思い出があるという。満州で路上生活をしてお腹をすかせていた時、露店でまんじゅうを売っている中国人の高齢男性が話しかけてくれたことだ。満州に来たばかりの時、近所に住む少年、徳清君とよく遊んでいたため、露店の高齢男性が話す中国語が黒田少年には理解できた。

「その老人が『日本の子どもよ、来なさい』と言っているのが分かりました。私が恐る恐る近づくと、『ありがたうはいらないよ』と言って、まんじゅうを地面にぽんと投げてくださいました。その老人は私が遠慮しないように、わざとまんじゅうを捨てたふりをして、捨てた物なのだから遠慮しないで食べなさいと声をかけてくれたのです。私はすぐにそれを拾い、夢中で食べました。その老人の優しさ、徳清君が教えてくれた中国語が私の命を救ったのです」

「今も遺体置き場の場所を覚えています」と言う黒田さんにとって、戦後80年になんかえたいことがある。それは満州に放置された母親や祖父、そして開拓民の遺骨をどうにか日本に持ち帰ること、そして現地に追悼碑を建てることだ。後に黒田さんは「中国残留邦人」となった弟と父親との再会を果たすが、弟は今も「中国で棄てられた」という思いを抱いている。黒田さんと弟の孝義さんにとっても、80年前の戦争はまだ終わっていない。

絵本『今を生きる 満州からの引き揚げの記録』に関する問い合わせは、電子メール kuropapa1@yahoo.co.jp（黒田毅さん）まで。



中国人の高齢男性がくれたまんじゅうが8歳の黒田さんを救った。絵本『今を生きる 満州からの引き揚げの記録』より

平和を紡ぐ旅 — 希望を携えて

戦後80年 司教団メッセージ

日本カトリック司教団は6月16日から19日まで東京の日本カトリック会館（江東区）で2025年度定例司教総会を開いた。全15教区から司教17人が参加し、戦後80年に当たっての司教団メッセージと「核兵器廃絶宣言」を一致して採択した。全文を掲載する。

平和を望むすべての皆様、若者の皆様へ

はじめに

今年、わたしたちは戦後80年を迎えました。この節目の年にあたり、あらためていのちを奪われた人々、さまざまなかたちで尊厳を侵害された人々、また破壊された自然環境を心に留め、祈りをささげます。人の生涯と同じほどの年月を経て、わたしたちは今、人間の尊厳を大切にするのだという思いを、平和を実現しようという願いを、どのように次の世代へと受け渡していくのでしょうか。25年に一度カトリック教会で祝われる聖年を迎えた今年、平和な世界を造る希望をもって皆様と、とくに若者の皆様と、ともに歩みを進めていきたいと願っています。

戦後80年を経て

2024年10月に日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）がノーベル平和賞を受賞しました。「核兵器は極めて非人道的な殺りく兵器であり人類とは共存させてはならない、すみやかに廃絶しなければならない」。受賞に際し行った演説で代表委員の田中照巳氏が語ったことばは世界の人々の心に届き、核廃絶について考えるきっかけとなったことでしょう。そのことばには、80年にわたって語り続けてこられた重みがありました。

あの戦争を経験した多くの方が、日本でも、世界でも、80年の間その経験を語り伝え、平和のために行動してこられたのです。

80年が経過した今、実際に戦争を経験した人は非常に少なくなっています。だからこそ、わたしたちは歴史的事実に誠実に向き合い、学び、記憶にとどめ、次世代に伝え、平和のために生かしていかなければなりません。

教皇フランシスコは2019年広島にて次のようにいわれました。「思い出し、ともに歩み、守る。この三つは倫理的命

令です。これらは、まさにここ広島において、よりいっそう強く、より普遍的な意味をもちます。この三つには、平和となる道を切り開く力があります。ですから、現在と将来の世代に、ここで起きた出来事の記憶を失わせてはなりません」。

この意味で、若者の皆様が広島や長崎、そして沖縄に、巡礼や平和学習の旅をなさるのはとても大切な、意義のあることです。

わたしたちはアジア・太平洋戦争以前から、日清・日露戦争や植民地支配を含むさまざまな行為によって、日本が近隣諸国に対し多大な苦しみを与えてきたことを忘れてはなりません。80年前、戦争終結に至る歴史の流れの中で、カトリック教会が平和の実現に求められる役割を十分に果たせなかった側面があります。明治以降、日本国が天皇を中心とした国家体制を整える中で、カトリック教会は忠君愛国の姿勢を示そうと苦心しました。その過程で、正戦論を用いて日本の戦争を正当化し、支持する立場を取ったのです。こうした過去を真摯に受け止め、回心し、次世代を担う人々とともに平和への歩みを進めていきたいと思いません。

世界の今

多くの市民による80年間の平和を目指す取り組みに並行して、国際連合とその加盟国は歩みを続けてきました。しかし平和を希求する国連憲章その他さまざまな規範は都合よく解釈され、また無視されることによって、世界は今、非道な戦争を目の当たりにしています。ウクライナとロシア、パレスチナとイスラエルをはじめとする中東、またミャンマーやアフリカ諸国でも、日々、多くの人々が殺され、目を覆いたくなる惨状が続いています。戦争は、人道的介入、予防、防衛などを建前にし、正義の名のもとに行われます。しかしそれらは自らを正当化するための拡大解釈であって、その結果多

くの民間人が被害に遭い、環境が破壊され、さまざまなリスクが拡大するのです（回勅『兄弟の皆さん』258参照）。

さらに、実際に戦闘行為を行っている国以外にも、戦争にならないように、また戦争になったときのためにと、軍備を強化する国が増えています。日本も同じで、日本国憲法9条により従来「できない」とされてきた集団的自衛権の行使容認、他国領土を攻撃できる長射程ミサイルの配備や武器輸出の解禁、自衛隊基地の新設、防衛費の大幅増など、国是としてきた平和主義がかすんでいます。

沖縄島をはじめ南西諸島においては、「防衛」の名のもと、次々とミサイル部隊が配備されています。80年前の沖縄戦では、9万4千人余りの一般住民を含む、20万を超える人のいのちが奪われました。沖縄の人々は、その恐ろしい戦争の記憶、そして戦後の米軍基地に関連するさまざまな暴力事件に苦しみながらも、あくまで非暴力による平和アピールを続けています。戦争を二度と繰り返さないように、性暴力を含む基地由来の被害が二度と起こらないように、そう叫び続けているにもかかわらず、今また、ミサイル基地等が目の前に作られているのです。沖縄の年配のかたがたの間には、「戦争の準備をしている」「戦争前と同じ歩みをしている」、そうした声が聞かれます。

戦争そのものの恐ろしさ、罪深さは、多くの人にとって明らかですが、戦争へと人々を導いた日常における思想や価値観の植えつけが、知らぬ間に世論を戦争に向けて突き進むものへと変えていくことを、80年前の経験から学ばねばなりません。今の日本は、果たして平和への道を進んでいるのでしょうか。

核兵器の廃絶に向けて

教皇フランシスコは2019年広島で「確信をもって、あらためて申し上げます。戦争のために原子力を使用することは、現代においては、これまで以上に犯罪とされます。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反する犯罪です。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の所有は、それ自体が倫理に反しています」といわれました。

日本被団協のノーベル平和賞受賞は、世界が核兵器使用の脅威の中で「核抑止」から抜け出し、核兵器廃絶に向かうための大きな一歩です。

核兵器は、爆発時だけでなく、その後の長い時間にわたる健康被害や社会的差別、そして環境破壊を引き起こすことを、被爆国に生きるわたしたちは経験してき

ました。日本の司教団は戦後50年にあって、強い決意のうちに宣言しました。

「核兵器の破壊的な力を体験したわたしたちには、その貴重な証人として、核兵器の廃絶を訴え続けていかなければならない責任があります」（「平和への決意 戦後五十年にあたって」）。

核兵器廃絶に向けた取り組みは、広島・長崎と米国の司教たちとのパートナーシップによるネットワークなどにおいて広がりを見せています。今回の受賞が、核兵器のない世界に向けた希望の灯となるように祈るとともに、世界と日本政府がこの「時のしるし」を深く心に留め、一刻も早く核兵器禁止条約の署名・批准に向けて行動することを強く求めます。

真の平和とは

聖書が語る「平和（シャローム）」は、もともと「欠けたところのない状態」という意味をもつことばです。その意味で、平和は、単に戦争や争いがいない状態ではなく、この世界が神の前に欠けたところのない状態、すなわち神がきわめてよいものとして造られたこの世界のすべ

てが、それぞれ尊重され、調和のうちにある状態のことだといえるでしょう。ですから、平和のために働こうとするとき、わたしたち自身の神との関係、人々との関係、自然環境との関係を振り返り、神の前に望ましい関係であろうと回心し、対話することなしには前に進めません。平和とは、核兵器や武力の均衡によってもたらされるものではないのです。

希望をともにして歩む

今年、カトリック教会は聖年を祝っています。これは、旧約聖書のレビ記(25章10節参照)にある「ヨベルの年」にちなんだ行事です。レビ記によるとこの年は、畑を休ませ、貧困などの理由により売却を余儀なくされた土地が返却され、雇い人となった同胞が解放され、負債が免除されたりする解放の年で、50年に一度巡ってきます。カトリック教会では、25年に一度聖年を実施し、神の前にすべての人が尊い存在であることを再確認し、権利を侵害されているならばその状態を解消し、搾取されているならばそれを返済し、負債から解放されるよう働きかけて

います。まさに、欠けてしまった状態から、本来の状態に戻す、平和を実現するための年といえるでしょう。

前教皇フランシスコは、今年の聖年のテーマを「希望の巡礼者」とし、「聖年が、すべての人にとって、希望を取り戻す機会となりますように」と招いています。

また、新教皇レオ十四世は最初の祝福の際、「あなたがたに平和があるように……。この平和のあいさつが皆さんの心に入りますように。皆さんの家庭に、どこにいたとしてもすべての人に、すべての民族に、すべての地に届きますように。あなたがたに平和があるように」と呼びかけられました。

平和を望むすべての皆様、若者の皆様、この80年の間、幾世代にもわたって受け継がれてきた平和への歩みを自らのものとし、希望を携え、平和を紡ぐ旅をともに歩み続けてまいりましょう。

2025年6月17日

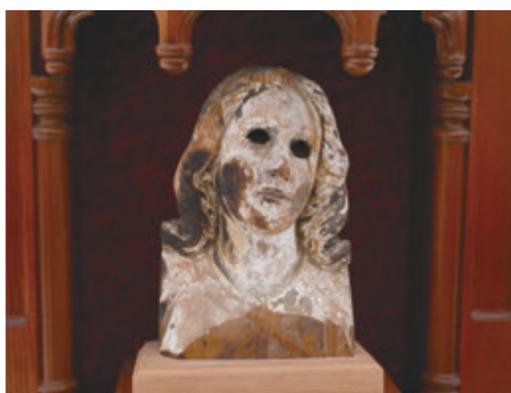
日本カトリック司教団

日本カトリック司教団 核兵器廃絶宣言2025

「核兵器の破壊的な力を体験したわたしたちには、その貴重な証人として、核兵器の廃絶を訴え続けていかなければならない責任があります」（「平和への決意 戦後五十年にあたって」）。

日本カトリック司教団は、戦後80年を迎えるにあたり、唯一の戦争被爆国の司教団として、広島・長崎の被爆者と市民が抱えてきた重い歴史と痛みを深く胸に刻み、核兵器廃絶に向けた強い決意をここに宣言します。

広島、長崎では、1945年の原爆投下により多くの生命が失われ、今なお多くの方がその苦しみと後遺症を背負って生きています。この悲劇を繰り返してはな



長崎の原爆で損傷した「被爆マリア像」

りません。

核兵器の存在は、神がきわめてよいものとして造られたこの世界と人間の尊厳をおとしめるものであり、すべてのいのちを脅かす深刻な脅威です。核爆発の際に発生する放射性降下物（フォールアウト）による被害や広範囲の環境破壊は、地球規模で生態系に甚大な悪影響を及ぼします。また、被爆者をより広義で捉える「グローバル・ヒバクシャ」の視点からは、核実験やウラン採掘などに関連する被害者の存在も忘れてはなりません。したがって、核兵器の開発、実験、製造、保有、使用は、倫理的に許されるものではありません。

核抑止力という考え方は、紛争解決における有効な手段とはいえないばかりか、「安全保障のジレンマ」に陥ることで、むしろ世界を核戦争の危機へと向かわせるものです。このような考えをわたしたちは決して容認できません。

わたしたちは、武力による威嚇を国家間の紛争解決の手段として否定する日本国憲法の精神を重んじ、平和的対話を通じて共存の実現に向けて働きかけてきました。いかなる紛争下においても、核兵

器を威嚇手段として用いることは、国際法および国際規範の観点からも、決して容認されるべきではありません。

わたしたちは、キリストの福音に従い、対話を通じた平和の実現を目指し、すべての人の生命と尊厳を守るために、核兵器を完全廃絶するよう強く求めます。

わたしたち司教団は、以下の行動を続けます。

- ・被爆の実相を世界中に伝え、核兵器の非人道性を訴え続けます。
- ・核兵器廃絶を目指す国内外の運動と連帯し、その実現に向けた行動を推進します。
- ・核兵器禁止条約（TPNW）の理念を支持し、日本政府が一刻も早くこれを署名・批准するよう働きかけていきます。
- ・平和教育や啓発活動を通じて、次世代に平和の理念を引き継ぎます。

世界は核兵器によらない平和を選択できるはずですが、核兵器廃絶を望む皆様に呼びかけます。すべてのいのちを脅かす核兵器によってではなく、すべてのいのちを尊ぶ神の愛の実践によって、神との、人々との、自然とのわたしたちの関係を調和のうちに保ち、平和な社会を実現するために祈り、力を尽くしてまいりましょう。

2025年6月17日

日本カトリック司教団

主日の福音解説

7月6日（年間第14主日）

ルカ 10・1－12、17－20

または 10・1－9

祈りながら出向く教会

亡き教皇フランシスコが教会に残した大きな遺産の一つは最後に主催したシノドス（世界代表司教会議）であろう。開催期間も異例の長さ（2021～24年）だったが、これまでのシノドスの概念やイメージを第16回通常総会ですっきり変えてしまった。シノドスを司教の集いという行事から全ての人に参加できるよう段階的に変化させた功績は大きい。実際、シノドス関連の文書には「全ての人に参加する」という表現が繰り返し出てくる。全ての人がこのに参加し、全ての人と共に歩む教会、これが今後、新教皇と共に私たちが目指す教会の姿になっていくのだろう。

ところで、今週の福音ではイエスが72人を任命し派遣する場面が朗読される。これはルカだけが書き記しているもので、他の三つの福音書には記述がない。こうしたルカの特徴を彼が異邦人の出身であり、医者でもあったことと関連付けて説明しようとする専門家もいる。四福音記者のうちマタイとヨハネはイエスの弟子であり、マルコはペトロの通訳だった可能性がある（エウセビオス著『教会史』）。しかし、ルカは生前のイエスを知らなかったことに加え、12使徒グループとの直接的つながりもなかった。ルカは自身の体験も踏まえつつ、宣教の務めは12使徒やその後継者など特別な人間だけが担うのではないことを72人の派遣を通して述べたかったのではないか。

もう少しだけ72という数に関して（写本の違いなどにより70人とする説もあるが）、創世記10章や民数記11章との関連が指摘されている点について言及しておきたい。前者では洪水の後、ノアの息子たちから全人類が誕生したと記されており、その子孫の数が70とされている。また後者ではモーセによって70

人の長老が任命され、後にエルダドとメダドが加わって72人になっている。後発の2人もモーセの協力者という立場で選ばれていることには相違ない。これらを踏まえながらルカのテキストを読み直すと、72人の派遣は全ての人に福音を告げ知らせるという世界的視野のものであったと解釈できるし、合わせて、先にも指摘した通り洗礼

を受けた全ての人がこの携わるよう招かれていると受け止めることもできる。イエスは「行きなさい」（ルカ10・3）と強い命令形を用いて72人を派遣しておられるからである。

いずれにしても派遣の命令と同様ここで忘れてはならないのは、もう一つの命令形、「願いなさい」（同10・2）という祈りの求めであろう。「収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主願いなさい」（同）とイエスは言う。働き手を送ってくださるのは神であり、神だけが収穫の唯一の主なのである。

さて、前述のシノドスに話を戻すと、教皇フランシスコは、あらゆる機会に、祈りのないところにシノドスはないとも語っておられた。祈りこそは教会のあらゆる活動の出発であり源泉であることを亡き教皇への感謝と共に思い起こす日々でありたい。

（熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会）



7月13日（年間第15主日）

ルカ 10・25－37

善きサマリア人

今日の福音である「善きサマリア人」の例え話は、教会に限らず、一般社会においても「善きサマリア人の法」という法律があるほどに有名なものです。

さて、今日の福音をよく読んでみると、似ているようで、ちょっと違う二つの主題でストーリー

が展開されます。イエス様と対話している律法学者はこう尋ねます。「わたしの隣人とはだれですか」。すると、イエス様は「善きサマリア人」の例え話を聞かせて「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われます。ここで主題は



「隣人とはだれなのか」とであると分かります。しかし、この例え話の始まりは「神への愛」と「隣人への愛」という二つの大きなおきてから出発しています。そこから、この話に込められたイエス様のメッセージには、「隣人を愛しなさい」ということに加え、「あなたも行って隣人になりなさい」というもう一つの主題があることが分かります。

わたしたちが隣人を愛すると言うとき、どうすることが隣人を愛することなのでしょう。これに答える前に、自分自身の隣人とはだれなのかについてわたしたちはまず考えなければなりません。隣人とはだれなのかを知らない人は隣人を愛することができないからです。そのため律法学者もイエス様に隣人とはだれかと質問したのです。ところが、イエス様は例え話を語りながら、だれが隣人なのかについてではなく、あなたが隣人になりなさいと命じられます。

今日の福音の中で「隣人」と翻訳されているギリシャ語「プレシオン(πλησιον)」は、元々「身近なもの」を意味する副詞です。つまり、距離感がほぼないことを意味します。そこから新約聖書では「仲間、同僚」などの意味で使われます。つまり、ただ仲がいいこと、親しんでいることを意味するのではなく、実際に身近にいることを意味する言葉です。イエス様が「隣人」とはだれなのかについての質問に直接お答えにならず、むしろサマリア人のようにあなたがたも行って隣人になりなさいと言われた理由は、遠く離れている人々にわたしたちの方から先に近寄っていくことを望んでおられるからです。だれが自分の隣人なのかを考えるのではなく、自ら先にだれかに近寄って行ってその人の隣人になるのが神の御心なのです。

ところで、世の中には別の目的を持って人に近寄る人が多いのですが、善きサマリア人が追い剥ぎに襲われた人に近寄った理由は、ただ憐れに思ったからです。そして自分の持ち物を全てその人のために使い果たしました。

「隣人を自分のように愛しなさい」というおきてを守るために自分の隣人がだれなのか、どこにいるのかと探すのは神の御心ではありません。今日の福音でイエス様が聞かせてくださった「善きサマリア人」のように、今自分はだれかの隣人になっているのかと自らを省みましょう。わたしたちが苦しんでいるだれかの隣人になること、それが隣人愛の始まりなのです。

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）

主日の福音解説

7月20日（年間第16主日）

ルカ 10・38－42

イエス様は、みんなに会いたい！

第1朗読で主の使いへのおもてなしの場面があり、福音朗読ではマルタとマリアもイエス様たちを迎えました。

今日の福音には最後の晩餐の前に、すでにマルタとマリアがみ言葉と主の食卓に奉仕する者として描かれています。ペトロたち使徒の姿は描かれてはいません。面白いですね(^)。

イエス様たちは勝手にどんどん人々を連れてきたのではないのでしょうか。マルタは忙しくて「主よ、わたしだけが頑張っています」と不満を爆発させます。行事で食事が足りずに慌てることは、よく見られる光景です。

マリアは顔を下げず、イエス様のもとで、じっとその話を聴いていました。「聴いていた」には「言うことを聞く、聞き従う」という意味があります。マリアは「主に従う者の姿」をわたしたちに教えています。ミサで説教をさせていただいている時に、話の中盤から下を向く、時計を確認される姿に気付くとへこみます。説教を最後まで顔を上げて聴き続けることは至難の業のようです(;▽;)。

マルタは、イエス様が招かれる、苦しみの中で神様を求める人々を一生懸命迎えようと自分をささげ、イエス様と食卓を共にしています。マルタもすごいことをちゃんと選んでいるのです。

ことばの典礼と感謝の典礼はどちらかだけを分けて祝うことはできません。イエス様は「必要なことはただ一つ。これを取り上げてはならない」と命じられています。わたしたちの奉仕はそれぞれであっても、どれも同じように必要な奉仕なのです。

司祭は忙しくて「おはよう」の挨拶も交わせない。日曜日の司祭「あるある」です。ましてや一つの教会だけでなく、数カ所の

教会を急いで回る司祭に声をかけるのは難しいことです。マルタとマリアの家に使徒たちの姿はありません。使徒たちは村中の人々に声をかけに行っていたのです。「イエス様がみんなに会いたい！」と。



マルタとマリアの家は多くの人々でいっぱいになり、イエス様はうれしい笑顔です。忙しくバタバタしているマルタを、わたしたちのお母さんであるマリア様が優しく手伝われたかもしれません。

ミサは自分だけを満足させるものではなく、イエス様が招く、神様を求める人々への奉仕です。イエス様とみんなとで一緒に喜ぶ、温かい場なのです。この喜びに招かれたことに「ありがとう(神に感謝)」と心から言えていますか？

イエス様は「マリア、よく聴いてくれたね。マルタ、マルタのおかげでみんなと楽しくご飯を頂くことができたよ、今日もおいしかった。二人ともみんなのためにありがとう」と声をかけられたことでしょうか。派遣の祝福です(^)/。

(寺浜亮司神父/福岡教区)

7月27日（年間第17主日）

ルカ 11・1－13

父は聖霊を与えてくださる

本日のルカ福音書のテーマは祈りです。祈りを教えてほしいと願う弟子たちにイエスは祈りを教えます。また、神はわたしたちの祈りを聞いてくださるお方であることが例えを使って説明されています。さらには「父は求める者に聖霊を与えてくださる」と約束しています。

福音書には人里離れた所で祈るイエスの姿が描かれています。そのイエスを弟子たちは度々目撃していたはずですが、自分たちも祈る者になりたいと考えたのでしょう。弟子たちはイエスに祈りの仕方を乞い求めます。しかもただの祈りではなく「ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言っています。洗礼者ヨハネの弟子たちはヨハネの弟子であることが分かる祈りをしていたのだと思われま

す。それがうらやましかったのでしょうか、イエスの弟子であることが分かる祈りを教えてほしいと願ったのでした。



イエスが弟子たちに直接教えてくれた祈りは「主の祈り」と呼ばれ、特に大切にされていることとはご承知の通りです。主の祈りの前半は「父よ」と呼びかけている相手、神の

ための祈りです。神による救いの完成とそのことによって神の名が知られ崇められることを願います。後半は人間のための祈りです。必要な糧が毎日与えられ、罪が赦され、誘惑に遭うことのないようにと願います。

真夜中に訪ねてきた友達が執拗に願うことによって、必要なものを手に入れるという例えが語られています。人間でさえ執拗に求められれば応じざるを得ないのだから、ましてや神が必死に祈り求める者の声を聞かないはずはないということです。また、不完全である人間でさえ自分の子どもには良い物を与えることを知っているという例えは、完全である神は求める者にふさわしい物を与えてくださることの確かさを教えています。何よりも父は聖霊を与えてくださるとイエスは励ましています。

試練や困難に出合うとき、わたしたちは神の助けを求めて懸命に祈ります。しかし、神がわたしたちの試練や困難を直接的に取り除いてくださることはほとんどありません。その代わりに試練や困難を乗り越えていくための力を与えてくださいます。それが父が与えると約束している聖霊です。

(立花昌和神父/東京教区 カットは全て高崎紀子)

文化

映画 『ガザからの報告』

この映画は、パレスチナ・ガザの人々を追ったドキュメンタリー作品。土井敏邦監督は34年にわたって繰り返しガザを訪ね、時に現地の家庭に住み込みながら取材、撮影を重ねてきた。「死者の数で報じられるパレスチナ人」ではなく、「私たちと同じ人間」を伝えたかった、と監督は話す。映画はニュース映像では見えない、ガザに生きる「人」の現実を丁寧に映し出す。

本作は2部に分かれ、第1部ではパレスチナ人の一家族「エルアクラ家」の25年間を追う。一家の父親は、イスラエルに故郷を追われ、各地を転々とした末にガザ最大の難民キャンプ「ジャバリア」にたどり着いた。長男はイスラエルによるパレスチナ人の土地の占領に抵抗し、イスラエル当局に拘束されたり、身に覚えのない罪で投獄されたりする。大学を卒業しても長く失業状態を強いられ、家庭を持つことにも困難が付きまとう。政治家たちの選択は、世代を超えてこの家族に影響し続ける。その中でも互いを思いやり、家族を尊重する姿は尊く、監督自身、「この一家は私の人生の学校だった」と後に語っている。



© DOI Toshikuni 2024

第2部は、イスラム抵抗運動組織ハマスとガザの民衆との関係を追う。2023年10月7日のハマスによるイスラエル攻撃は、ガザの住民に何をもたらしたのか、現地ジャーナリストM氏は兄弟を砲撃で亡くしながらも、追い詰められていく民衆の思いを命懸けで発信し続ける。ナレーションはなく、登場人物の語りだけでつなぎ、日本語字幕が付く。第1部120分、第2部85分。詳細は公式サイト(<http://doi-toshikuni.net/j/gaza/>)参照。

本作は現在、自主上映を呼びかけている。申し込みに対しDVDが有料で貸し出されるのでDVDプレーヤーとテレビ(モニター)があれば小規模な会場でも上映会ができる。上映料は規模に応じて1万円から。上映会の詳細は、下記のサイト参照(<http://doi-toshikuni.net/j/info/screening.html>)。

きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク)7月

【教皇の意向：識別する力を養う】

人生の道を選択する上で、キリストや福音から私たちを遠ざけるものをいかに退けるか、つまり、どのように識別するかについて、改めて学ぶことができますように。

【日本の教会の意向：人間の尊厳】

一人ひとりの人間としての権利や尊厳が保たれ、脅かされることのない社会を築いていくことができますように。

識別で最も大切なことは、人生の究極の真理と目的を明確にすることです。究極の真理とはイエスの生涯と福音によって示された、全ての人に及ぶ神の限りない愛です。

そして、究極の目的とは神の愛に答えて「神を愛し、人を愛する」ことです。これはどの立場の人にも求められるものです。また識別で大切なのは、それを妨げるものを見分けることで、その最大のものはエゴイズム(利己主義)です。識別の際は神の前に自分を置き、愛の神と響く心でエゴ(自我)から離れ、そこから「神を愛し、人を愛する」のに最もふさわしい選びをしていくことです。ゲツセマネはイエスの最も大きな識別の時だったと言えます。イエスに倣うことで、イエスから識別を学べるよう祈りましょう。

*

「この最も小さな者の一人にしたのは、

わたしにしてくれたことなのである」とイエスはおっしゃいました。日本では人間の尊厳は法的には保障されていますが、実際には制度の限界や社会習慣によって尊厳が侵される場合も多くあります。過労死がいまだに多く起こり、生活の不安定をもたらす非正規雇用も広がり、外国人労働者への人権侵害も見られます。障害者施設での入所者への虐待や差別も報じられており、女性や子どもへの家庭内暴力や差別、児童への虐待やいじめも多く報告されています。イエスの言葉に答えて心に慈しみを養い、人間の尊厳を育む社会を築いていけるよう祈りましょう。

短歌

春日つみ

投稿規定 毎月5日まではがきに3首以内。毎月1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記のこと。下記QRコードからオンライン投稿も可。



ギリシャ語で回心はメタノイアとう逆さに読めばあいのためなり 日野 広山 弘子

【評】ギリシャ語の「メタノイア」は「悔い改め」「回心」という意味であると説教で聞いた作者。逆さに読むと「愛のため」になる。心の向きを「愛のために」変えようと胸深く刻む姿が感じられる。

川崎 印出美由紀
横濱 吉村 一
横濱 永井 栄司
福岡 三谷 叔美
名古屋 富井 弘光
秋田 進藤八重子
豊橋 赤澤 進
東京 大江 照子
静岡 櫻井 眞子

俳句

稲畑廣太郎選

俳句投稿規定 毎月5日まではがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。下記QRコードからオンライン投稿も可。



吹田 野村 愛子
大阪 酒井 湧水
◎紅白の躑躅追悼ミサ飾る
【評】教皇様の追悼ミサか。清い忌心が伝わる
◎貴石めくシヨコラやバレンタインデー
【評】チヨコレートを宝石に見立てたのが新鮮
大牟田 北田 紀子
府中 荒井 美邦
日野 弘子
豊橋 赤澤 進
秋田 畑山 真理子
各務原 安江 郁子
伊丹 上野 恵津子
神戸 平尾 孝子
丹波篠山 高岡 すみ子
松山 丹下 はつみ
神戸 屋代 弘忠
福岡 徳永 朝子
大分 本田 純江
福岡 三谷 淑美
秋田 進藤八重子
甲府 穴水 公一
選者 吟

訃報

三喜田(みきた)虎太神父 (イエズス会) 3月8日、東京・練馬区の同会ロヨラハウスで老衰のため逝去。98歳。1926年長野県生まれ。54年同会入会。62年司祭叙階。64年から同会が設立母体である広島学院中学校・高等学校(広島)で数学を教えた。69年松江助任(島根)。74年宇部助任。76年同主任。78年細江教会でサバティカル(以上山口)。80年から81年までフィリピンで英語研修と司牧研修。81年下関労働教育センター(山口)。84年から86年まで静岡聖光学院中学校・高等学校(静岡)で倫理と宗教を教えた。86年から2000年まで六甲レジデンス(兵庫)で司牧活動。01年柳井担当。04年山口助任。05年宇部小野田ブロックチーム。15年小野田老人ホームチャプレン(以上山口)。22年7月からロヨラハウスで療養していた。朗らかな人柄で、説教の中でも普通の会話の中でも人を楽しませ、多くの人々から慕われた。



平野キミ修道女 (シヨファイユの幼きイエズス修道会) 5月2日、同会仁川本部修道院(兵庫)で老衰のため逝去。93歳。1931年長崎県生まれ。初誓願後は鹿児島・奄美大島の古仁屋(こにや)信愛幼稚園(当時)の教諭として奉仕した後、名瀬天使園(当時/乳児院)の保育士として幼いのちへの奉仕にまい進した。70年から6年間、同会福岡修道院の院長として、福岡サンスルピス大神学院で司祭と神学生のために奉仕(以上福岡)。再び名瀬天使園の保育士、園長を務めた後、長崎のマリア園(当時/児童養護施設)、熊本の天使の園保育園、福岡の久留米天使園(児童養護施設)で保育士として働いた。派遣された場での教会奉仕にも力を注いだ。99年に社会福祉の現場を退いてからは、奄美大島の名瀬信愛修道院の院長として、また入来(いりき)修道院の聖堂係としても喜んで奉仕した(以上鹿児島)。2020年から体調を崩して入退院を繰り返すようになり、熊本の西合志(にしごうし)修道院で療養生活を送った。21年4月から仁川本部修道院での療養生活に入り、デイサービスに通いながら祈りの人として生きた。今年2月から急激に衰弱が進んで食事の摂取が難しくなり、脱水症で高熱が続き入院。退院後は



在宅訪問医療を受け、介護職員と姉妹たちの祈りに支えられ、病者の塗油の秘跡に力付けられて、最後の苦しみの時を祈りのうちにささげ尽くした。

村上陽子修道女 (シヨファイユの幼きイエズス修道会) 5月12日、兵庫県西宮市内の病院で老衰のため逝去。80歳。1944年熊本県生まれ。初誓願宣立後、保育士として福岡の久留米天使園(児童養護施設)で6年間、熊本の天使の園保育園で14年間、幼いのちを育むことに献身した。93年からは長崎のマリア園(当時/児童養護施設)で奉仕。2007年からカンボジアに派遣され、現地の人々と共に生き、神の愛を伝えた。帰国してからは同会福岡修道院(福岡)や小野修道院(兵庫)にも派遣され、小教区での奉仕や地域の人々との交わりを生きる日々を過ごした。15年からは、同会仁川修道院(兵庫)で外回りの環境美化のために働いた。22年に大腿(だいたい)骨頸部(けいぶ)骨折と腰椎圧迫骨折で入院。退院後は療養生活となったが、祈りと穏やかな生活の中、デイサービスで出会う人々や姉妹たちに神のいつくしみを伝えた。今年2月に高熱のため入院し、4月に病者の塗油の秘跡を受け、最期は安らかに御父のみもとに旅立った。



牧野玲子修道女 (殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会) 5月13日、北海道石狩市内の同会修道院で入浴中、溺水のため逝去。87歳。1937年北海道生まれ。66年同会入会。69年初誓願。76年終生誓願。初誓願宣立後に教員免許を取得し、教育分野で全力を尽くした。藤女子中学・高等学校(北海道)で15年間教師として働いた後、87年に上智大学(東京)大学院入学。92年に哲学・神学の博士号を取得し、博士課程を修了した。藤女子中学・高等学校にて1年間校長を務めた後、埼玉県草加市の草加藤幼稚園で事務職に就き、埼玉にある大学の非常勤講師も務めた。28年間過ごした草加マリア院(同県)では、9年間責任者として奉仕したが、2021年の同院閉鎖に伴い、花川マリア院(北海道)に移り晩年を過ごしていた。自分自身にも、また他者に対しても厳しさを持ち、藤学園の教育精神を大切に、それを生徒



に徹底的に伝えることを自分の使命としていた。修道名である保護の聖人の聖エディット・シュタインを大変尊敬し、哲学の面

でも模範にして、倫理社会の授業に熱心に取り組んだ。生徒、卒業生、卒園児や職員らのためによく祈っていた。

告知板

■宮城

▶公開講座『生きる意味』の豊かさへ 深い支えが真の自由をもたらす 7月12日(土)午後1時30分~3時30分、仙台白百合女子大学1号館2階122室。講師=上田紀行(東海学園大学特命副学長)。7月10日(木)までに下記QRコードから要申し込み。先着140人。無料。電話 022-372-3254 (平日午前8時30分~午後5時15分) 仙台白百合女子大学総務課



■東京

▶慈しみ深き会主催「沈黙の祈りのつどい」7月10日(木)午後1時30分~3時30分、麴町教会岐部ホール404号室。指導=九里彰(くのり あきら)神父(カルメル修道会)。故ウィリアム・ジョンストン神父(イエズス会)の『愛と英知の道』から講話後、沈黙で祈る。申し込み不要。無料(献金

歓迎。電話 042-473-6287 (午前11時~午後7時) 篠原

▶写教の会(その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い) 7月20日(日)午後4時30分~5時50分、麴町教会岐部ホール309号室。主宰=高橋登志子修道女(聖心会)。持参する物=筆ペン、文鎮、下敷き30x50mm(フェルトまたは新聞紙)。7月17日(木)までに要参加申し込み。500円(自由献金)。☒phostere@gmail.com 古賀

■長野

▶絵画展「私たちの生きる時代 ウクライナの子もたちがみた世界」開催中(7月13日(日)まで/午前9時~午後5時/7月6日(日)・12日(土)除く)、清泉大学図書館上野キャンパス1階。当時8歳から15歳の子もたちが描いた約70点の作品を展示。無料。電話 026-295-1320(平日午後6時まで) 清泉大学図書館

番組

ラジオ心のともしび

(朗読・坪井木の実)

7月の放送日と執筆者 1日(火)三宮麻由子・2日(水)こいずみゆり・3日(木)服部剛(ごう)・4日(金)松浦信行・5日(土)コリー・ダルトン(以上テーマ「ためらい」)・7日(月)今井美沙子・8日(火)古川利雅・9日(水)下窄優美(しもさこ・ゆうみ)・10日(木)古橋昌尚・11日(金)片柳弘史(ひろし)・12日(土)山本久美子・14日(月)崔友本枝(ちえー・ともえ)・15日(火)竹内修一(おさむ)・16日(水)岡野絵里子・17日(木)許書寧(きよ・しゅにん)・

18日(金)森田直樹・19日(土)村田佳代子・21日(月)中井俊巳・22日(火)山本ふみり・23日(水)堀妙子・24日(木)熊本洋(以上テーマ「居場所」)・25日(金)萩原久美子・26日(土)植村高雄(以上テーマ「ためらい」)・28日(月)湯川千恵子・29日(火)越前喜六(以上テーマ「居場所」)・30日(水)古橋昌尚(「アナク」)・31日(木)遠山満(みたる)(「約束」)。

ホームページ(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。詳細は電話 075-211-9341。



ラジオ YBU 心のともしび 5分			
放送局	放送日(曜日)時間	放送局	放送日(曜日)時間
STVラジオ	月~金=5:35 土=5:00	KBS京都	月~金=5:55 土=5:15
		毎日放送	月~金=5:45 土=4:55
		和歌山放送	月~金=6:35 日=6:15
		ラジオ関西	月~金=5:35 日=6:05
エフエム青森	月~土=6:50	山口放送	月~土=5:25
IBC岩手放送	月~土=5:20	中国放送	月~土=5:00
ラジオ福島	月~土=5:25	山陽放送	月~土=5:25
エフエム仙台	月~金=5:55	山陰放送	月~土=5:25
山形放送	月~土=5:10		
エフエム秋田	月~土=5:55	南海放送	月~金=5:25 土=6:45
新潟放送	月~金=5:25 日=6:20	四国放送	月~金=5:10 土=6:10
		高知放送	月~金=5:20 日=6:35
ニッポン放送	月~金=5:35 土=5:25	RKB毎日放送	月~金=5:25 日=6:00
信越放送	月~金=5:25 日=6:15	熊本放送	月~金=5:10 日=6:05
山梨放送	月~土=5:25	長崎放送	月~金=5:25 土=6:35
静岡放送	月~金=5:25 土=5:40	大分放送	月~金=5:25 土=7:00
		宮崎放送	月~土=5:20
福井放送	月~金=6:45 土=5:50	南日本放送	月~金=5:25 日=6:05
北陸放送	月~土=5:15		
東海ラジオ放送	月~金=5:45	琉球放送	月~土=5:25
北日本放送	月~金=6:30 土=5:30		